慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	トマス・ジェファスンとアダム・スミス
Sub Title	Thomas Jefferson and Adam Smith
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1983
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.75, No.特別号 (1983. 2) ,p.986(70)- 997(81)
JaLC DOI	10.14991/001.19830201-0070
Abstract	
Notes	高橋誠一郎名誉教授追悼特集号 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19830201-0070

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

トマス・ジェファスンとアダム・スミス

白井　厚

1. はじめに
2. アメリカにおけるスミス
3. ジェファスンにおけるスミス
4. ジェファスンのスミス観

1. はじめに

建国以来僅か206年，ジェイムズタウンの植民から算えても375年にしかならぬアメリカ合州国は，若い国である。しかし短期間にアメリカは急成長を遂げ，世界最大の大国となった。この急成長はアメリカの経済学の歴史にも言える[(1)]のであって，片々たるパンフレットにその時代の経済思想を映していた植民地時代から，2世紀余の間にアメリカは経済学の中心となった。それにもかかわらず，この国の経済学の歴史を語る研究は内外ともに極めて少ない[(2)]ので，本稿では，建国期の経済思想の重要な面を代表するトマス・ジェファスンとスミスとの関連を探り，アメリカ経済学史におけるヨーロッパ経済学との関係の一例を見ようとする。

ジェファスンは政治家として知られるが，家業はヴァジニア[(3)]のプランター，専門職は弁護士であって，経済学者ではない。にもかかわらず彼はアメリカ最大の啓蒙思想家，ルネサンス的万能人として諸学に通じ，農本主義[(4)]という彼の特殊な経済思想は影響力を持ち[(5)]，それにもとづいたlibertarian な政治思想も，Virginian dynasty と呼ばれる Madison, Monroe らの後継者を通じて建国

注（1） たとえば大学で経済学の講座が置かれるようになったのは1820年頃からで，これは経済学の祖国たるイギリスやフランスとほぼ同時期である。古屋美貞『米国経済学の史的発展』（内外出版印刷，1932），pp. 82-3.

（2） アメリカ経済学史についての最近のサーヴェイとしては，白井厚・高哲男「学界展望・アメリカ経済思想史」『経済学史学会年報』19号，1981年。

（3） ジェファスンとヴァジニア，特にアルブマール郡との関係については，拙稿「トマス・ジェファスンとアルブマール郡」本誌75巻3号，1982年6月。

（4） ジェファスンの思想形成，農業者としてのジェファスン，農本主義者としてのジェファスンについては，拙稿「トマス・ジェファスンの経済思想」(1)，本誌69巻8号，1976年12月。重農主義との関係については，拙稿「ジェファスンとフランス重農主義――トマス・ジェファスンの経済思想(2)――」本誌71巻5号，1978年10月。

（5） Jeffersonian School については，Michael J. L. O'Connor, *Origins of Academic Economics in the United States* (New York: Columbia University Press, 1944), pp. 19-29.

期のアメリカを支配した。また経済思想においても対立した Hamilton の Federalists が消滅したため，今日の Democrats, Republicans 両党ともにジェファスンの Republicans をその祖とし，共和主義，ディモクラスィ，地方分権，小さな政府構想，信仰の自由など，何らかの意味でジェファスンの伝統を受け継いでいると言える。

2. アメリカにおけるスミス

言うまでもなく1776年は，世界を揺がした二つの歴史的文書が大西洋の両岸で発表された年である。一つはアダム・スミスの著書『国富論』（3月9日）であり，他はトマス・ジェファスン起草の「独立宣言」（7月4日）。経済学の古典と政治的宣言という差はあるが，ともにイギリスの重商主義政策に対する痛打であり，自由主義の支柱であり，市民社会の自立・自律と植民地の自立・自律の主張として，後世に限りない影響を与え続けている。

この年，スミスはすでにグラースゴウ大学教授の地位を去った52歳，ジェファスンは政界に登場したばかりの33歳で，二人の間に個人的な接触はなかったようだが，スミスはアメリカに深い関心を有していた。『国富論』草稿をタウンゼントのもとへ送った1763年はアメリカにおいてフレンチ・アンド・インディアン戦争が終った年であり，草稿を抱いてロンドンへ出たのは，ボストン茶会事件の1773年であった。グラースゴウがアメリカ貿易の一中心（特にたばこの中継貿易）であったという環境も彼のアメリカへの関心を強めた理由の一つであろうが，『国富論』第4篇第7章は植民地を論じ，その大部分はアメリカを対象としている。『国富論』は稿成ってのち3年を経てやっと出版され，“このいちじるしい遅延にはさまざまな理由のあったことが推測されるが，当時急迫を告げていたアメリカ植民地の事態が，イギリスの首都であらたに広い思想的・学問的交友のうちに置かれたスミスに対して，もともと深く現代的課題の解剖と批判とを目的として執筆された『国富論』の第一次の成稿のなかに，新鮮な時局的関心に促された広汎な思索と勉学と討論とにもとづくアメリカ問題分析の成果を加えねばならぬことを，つよく自覚させたことこそ，その最大の理由であったと考えてよいであろう。とくに，当時ロンドンに久しく滞在していた老ベンジャミン・フランクリンから，スミスは多くを教えられたであろうし，エドマンド・バークとの交友も熱りのなかったものとは考えられない。”(6)

スミスには有名な植民地合邦論，放棄論があり，それは必ずしも時代の先端を行くものではなく

注（6） 小林昇「『国富論』におけるアメリカ」，『小林昇経済学史著作集』II（未来社，1976）所収，p. 257.
スミスは『国富論』を書く時1章ごとにフランクリンやプライスなどに示して修正を重ねたというフランクリンの話については，John Rae, *Life of Adam Smith* (London & New York: Macmillan, 1895), p. 265. 大内兵衛・節子訳（岩波書店，1972）pp. 329–30. ここでは，Parton, *Life of Franklin* の“アメリカ植民地は『国富論』の基本的真理の実験的な証拠をなしている”という文が引用されている。訳文は必ずしも邦訳書によらない。他の引用についても同じ。

あいまいさを残したものではあったが[7]，アメリカ問題についての彼の理解，開明性は賞されて良いであろう[8]。『国富論』の一節は言う，

“われわれの諸植民地は力だけで容易に征服されるであろうと，ひそかに思っている人々は，たいへんな低能である。自分たちの大陸会議とよんでいるものの諸決議を，現在，左右している人々は，……ひとつの広大な帝国のために，あたらしい統治形態を考案することにあたっているのであって，その帝国は，世界にいままで存在したかぎりでは，最も大きく最も恐るべきもののひとつになるであろうと，彼らはひそかに思っているし，しかもまったく，そうなる可能性が非常に強いようである[9]。”

1775年，ジェファスンはこの大陸会議の議員に選ばれ，やがて新しい統治形態の基礎となる「独立宣言」を起草することとなった。

Paul K. Conkin によれば，アメリカの経済学はスミスによって始められたのではなく，フランスの重農学派が先ず新しい学問として紹介された。しかしすぐに『国富論』が非常な権威として声価を得，1776年以後1850年頃までの国家形成期に，経済学を発達した社会科学として確立するためにスミスは最も役立ったのである[10]。

経済学の本はもちろんヨーロッパから輸入されたが，またフィラデルフィアを中心にアメリカでも出版されるようになった。Michael J. L. O'connor は，アメリカで出版または執筆された経済学関係の著書または翻訳について，次の表を示している[11]。

1771-1800

1771 Steuart, Sir James. *Principles of Political Economy*. Philadelphia.

1789 Smith, Adam. *The Wealth of Nations*. Philadelphia.

1796 Godwin, William. *Enquiry concerning Political Justice*. Philadelphia.

1797 Rousseau, Jean Jacques. *A Dissertation on Political Economy*. Albany.

注（7）アメリカの独立について当時のイギリス人の重要な論客は，Francis Hutcheson, Joseph Massie, David Hume, Edmund Burke, Josiah Tucker, そしてもちろん Thomas Paine. スミスのアメリカ論については，Andrew S. Skinner, “Adam Smith and the American Economic Community, an Essay in Applied Economics,” *Journal of the History of Ideas*, January-March 1976.

（8）ミンガン大学のクレメンツ図書館の Rosslyn Manuscripts の中に，スミスの弟子ウェダバーン所有の文書に含まれていたため，スミスの筆と推定される論文があり，G. H. Guttridge: Documents. “Adam Smith on the American Revolution, an Unpublished Memorial,” *American Historical Review*, 1932-33, Vol. 38. において初めて公表された。これは1778年2月に書かれたもので（独立戦争の終了は1781年），アメリカのほぼ完全独立を支持している。邦訳は水田洋訳『スミス国富論』（「世界の大思想」15，河出書房，1965）の下巻に「アメリカとの紛争の状態についてのおぼえがき」として収録されている。

（9）A. Smith, *Wealth of Nations*, The Glasgow ed., ((Oxford: Clarendon Press, 1976), II, 623. 上記水田訳<下>，p. 109.

(10) Paul K. Conkin, *Prophets of Prosperity: America's First Political Economists* (Bloomington: Indiana University Pess, 1980), pp. 17-18.

(11) O'connor, pp. 330-31.

1801-1830

1809 Malthus, Thomas R. *An Essay on the Principle of Population.* Georgetown [D. C.].

1812 Ganilh, Charles. *An Inquiry into the Various Systems of Political Economy.* New York.

1817 Say, Jean B. *Catechism of Political Economy.* Philadelphia.

1817 [Marcet, Mrs. Jane H.] *Conversations on Political Economy.* Philadelphia.

1818 Destutt de Tracy, Antoine. *A Treatise on Political Economy.* Georgetown, D. C., 1817 [i. e., 1818].

1819 Ricardo, David. *On the Principles of Political Economy, and Taxation.* Georgetown, D. C.

1820 Raymond, Daniel. *Thoughts on Political Economy.* Baltimore.

1821 Say, Jean B. *A Treatise on Political Economy.* Boston.

1821 Malthus, Thomas R. *Principles of Political Economy.* Boston.

1824 [Stirrat, (David)]. *A Treatise on Political Economy.* Baltimore.

1825 McCulloch, John Ramsay. *Outlines of Political Economy*; notes by McVicker. New York.

1826 Cardozo, Jacob N. *Notes on Political Economy.* Charleston, S. C.

1826 Cooper, Thomas. *Lectures on the Elements of Political Economy.* Columbia, S. C.

1826 [Cushing, Caleb], *Summary of the Practical Principles of Political Economy.* Cambridge, Mass.

1827 List, Frederick. *Outlines of American Political Economy.* Philadelphia.

1828 [Jennison, William]. *An Outline of Political Economy Designed for Seminaries.* Philadelphia.

1828 [Phillips, Sir Richard]. *Blair's Outlines of Political Economy.* S. G. Goodrich, Boston.

1828 Phillips, Willard. *A Manual of Political Economy.* Boston.

1829 Dew, Thomas R. *Lectures on the Restrictive System.* Richmond, Va.

1830 [Carey, M.] . . . *A Manual of Political Economy.* Philadelphia.

1830 McVickar, John. *Introductory Lecture.* London.

1831-1840 (略)

これによると，重農学派の著書はアメリカではこの間には訳されず，独立前に出版されたのはスチュアートの書[12]のみで，かなり遅れてスミスがそれに続いたことになる。英語国だからやはりイギリスのスミス，リカードウ，マルサスが有力で，後にセーが使われ，1820年以後アメリカ人による著書も次第に出版されようになった。

スミスはもちろん経済学の祖として一般に尊重されたが，必ずしも無条件に受け入れられたわけではない。ヴァジニアの当時革新的と言われたウィリアム・アンド・メアリ大学においては，1772年から1812年にかけて学長であった James Madison 師（大統領のマディスンではない）が，1784年から1798年までの間のある時に，この大学で『国富論』をテキストに用い，これはこの書をアメリカの大学で用いた最初の例だという。1803年の末にかけて，南部の書店にとってこれは売れ行きのよい（saleable）本であった[13]。

だが，北部においてスミスはあまり歓迎されず，ハーヴァドでは用いられなかった。その理由としては，スミスは理神論的で北部の熱心なピュアリタンとは合わなかったこと，自由貿易論は農産物を輸出し外国製品を輸入する南部には好都合だが，北部の産業資本家には不利だったこと，重商主義批判は北部の商業資本に合わなかったこと，ジェファスンのような影響力のある推薦者がいなかったことなどが考えられ[14]，ヨーロッパ経済学輸入における南北の差は，面白い問題である。親英的な Alexander Hamilton を支持した北部は，保護主義の推進基地であった。

3. ジェファスンにおけるスミス

ジェファスンは経済学についてまとまった著作を残さなかったが，自由主義，農本主義の立場から，本国の重商主義政策を批判し，自由貿易論，土地制度改革論（限嗣相続法，長子相続法廃止），土地均分論（北西部土地条例），公債論（ハミルトンとの論争），租税・財政論（小さな政府，富者課税），国立銀行違憲論，奴隷制度論，独占・投機・紙幣乱発批判などの経済論を展開し，対フランス通商交渉使節となり，通貨単位としてのドルを定め，大統領の時には出港禁止法（1807年），輸入禁止法

注 (12) スチュアートの『原理』1771年版は，アメリカにおいて発行された最初の経済学書ということになるが，James G. Evans Jr. の *American Bibliography* や *The National Union Catalog* には記載がない。Joseph Sabin, *Bibliotheca Americana: A Dictionary of Books relating to America*, 1962. はこれを示しているが，そのタイトルは Charles Swift Siché Hildeburn, *A Century of Printing: The Issues of the Press in Pennsylvania, 1685-1784*. Philadelphia Press of Matlack & Harvey, 1885-6. から得たようである。筆者の調査では，アメリカの主な図書館，American Antiquarian Society の図書館，The Historical Society of Pennsylvania の稀覯書を所有する The Library Company of Philadelphia, The Free Library of Philadelphia にもこの版はない。The Library Company はフランクリンが設立したもので，そこからの連絡によると，1770年までの蔵書中に『原理』の初版があり，大陸会議議員はこれを読みえたとのことである。1771年版というのは全くの ghost edition か，またはごく少部数印刷されたものであろう。

(13) O'Connor, pp. 20-21.

(14) O'Connor, p. 113. 大道安次郎「トマス・ジェファスンの立場——スミス経済学のアメリカ導入史の一節——」『人文論究』2巻5・6号（1952年2月），pp. 6-7.

(1808年)，通商禁止法 (1809年)などのドラスティックな経済政策を展開した。彼が経済学をどのように学んだかは資料的にはあまり判然としないが，手紙類などに示されたスミスへの言及は以下のごとくである。

1790 May 30 (ニュー・ヨーク) Thomas Mann Randolph, Jr. への手紙

(読書についての助言)

"……法律の勉強は，さまざまな見地から見て役に立ちます。それは人間に，自分自身にとっても，隣人にとっても，また公衆にとっても役に立ちうる資格を与えます。それは，政界で頭角を現すのに最も確実な手段です。政治経済学においては，私は，スミスの国富論が現存するものでは最良の書だと思います。……(モンテスキュー，ロック，フェデラリスト，バーグ，ヒュームらの書の推薦)……また，チュルゴとフランスのエコノミストたちが書いた優れた理論書がいくつかあります。"[15]

1804 Feb. 1 (ウォシントン) Jean Baptist Say への手紙

(マルサス『人口の原理』とセーの『政治経済論』をもらった礼)

"あなたの丁重なお手紙と政治経済学についての2冊の非常に興味深い本をいただき，お礼を申さねばなりません。これをいただいたので，私は僅かな余暇にマルサスの人口論を精読することになりました。この人口論は健全な論理を持っており，A. スミスの意見が，他の経済学者の意見と共に巧みに検討されています。私は，あなたが同じ問題を扱っている章を読み，マルサスの意見があなたによって確証されているのを見て嬉しく思いました。私は，貴書を大きな喜びをもって読み進むことでしょう。"[16]

1807 June 11 (ウォシントン) John Norvell 宛の手紙

(読むべき書物の推薦)

"もしあなたの政治的な探究がさらに進んで貨幣と商業の問題を考えるなら，セーの『政治経済論』が手に入らない時は，スミスの『国富論』が読むべき最良の書です。セーの書は，スミスと同じ問題を同じ原理で扱っていますが，少ない分量でもっとわかりやすく論じています。"[17]

1813 Sept. 11 (Poplar Forest) John W. Eppes 宛の手紙

(イギリスの公債史について)

"スミスは，イングランドの公債史と，それを論じたいくつかの見解を説明しています。そし

注 (15) *The Papers of Thomas Jefferson*, ed. J. P. Boyd (Princeton: Princeton Univ. Press, 1961), XVI, 449.

(16) *The Writings of Thomas Jefferson*, ed. Andrew A. Lipscomb and A. E. Bergh (Washington: The Thomas Jefferson Memorial Association, 1904), XI, 1-3. このあとは拙稿「トマス・ジェファスンの経済思想」(1), (1), p. 30. の引用文に続く。

(17) *Ibid.*, XI, 223.

てプライス博士は，年金についての彼の著書の中で，減債基金について価値のある章を書きました。[18]"

1813 Nov. 6 （モンティチェロ） John W. Eppes 宛の手紙

（紙幣について）

"金貨・銀貨の代りに紙幣を発行することについて，スミスが挙げている唯一の利益は，(B. 2, C. 2434ページ) '高価な手段を，遙かに安く，しかも時には便利さにおいて変らぬもので置き換える' ことです。すなわち，437ページに '金銀を海外に送って外国の品物に換え' とあり，その代りに紙幣を安い手段として用いることです。"

"彼はまた，輸出された貨幣と交換に受け取った金の一部は，増加する産業の雇用にとっての原料，道具，設備となろうと認めました。"

"しかし，前記のような状況からある国の最少の流通手段をわれわれが必要とすると考える代りに，われわれが勘定すなわち3,500万ドルの中間支払期にいると想像してみましょう。スミスは，この5分の1は少なくとも正貨で保有しなければならないと考えます。ということは，2,800万ドル分の正貨は，他の商品と交換するために輸出することができるのです。"

（銀行による紙幣発行について）

"これについての答えは，アダム・スミス (B. 2, C. 2, 462 ページ) から引用されるでしょう。[19]"

1814 Dec. 27 （モンティチェロ） Correa de Serra 宛の手紙

（原理の無知について）

"セー氏は驚くでしょう。アダム・スミスとエコノミストによって財政の諸原理が展開された40年も後になって，またセー氏がわれわれに正確・ち密・明快なかたちでそうした諸原理を示した12年も後になって，われわれの国にはその諸原理についてこんなにも無知があろうとは。[20]"

1816 April 6 （モンティチェロ） Joseph Milligan 宛の手紙

（Tracy の訳の出版に関連して，訳は1週間後に完成することを告げ，本のタイトルなどを指示し，次の Prospectus の文章を送った。[21]）

1817 "Prospectus" to Destutt Tracy, *A Treatise on Political Economy*, 1817.

解説 (Prospectus)

"現代の政治経済学は，エコノミストたちと呼ばれるフランスの政治的党派の手によって始めて，本格的な科学のかたちをなした。エコノミストたちは，政治経済学を，諸社会の自然的秩序についての包括的体系の一分枝にすぎないとした。まずケネが，ついでグルネ，ル・トゥロ

注 (18) *ibid.*, XIII, 367.
(19) *ibid.*, XIII, 413–417.
(20) *ibid.*, XIV, 224.
(21) *ibid.*, XIV, 460.

ーヌ，チュルゴ，そしてデュポン・ドゥ・ヌムール（今は合州国の教養あり博愛心に富み尊敬すべき市民）がその発展を指導し，そして以来彼らが守ってきた方策をわれわれの研究に与えた。彼らによって確立された多くの健全な価値ある諸原理は，一般に承認されるようになった。いくつかの原理は，生まれたばかりの科学にありがちなように，疑問を投げかけられ，多くの議論を招くに至った。生産についての彼らの意見，そして課税の正当な対象についての意見は，特に論争の種だった。そして彼らの課税原理にどんな価値があるにせよ，それが普及しなかったのは驚くには当らない。それは，正しさが問題なのではなく，その意志が最高の法であるべき人民にとって受け容れにくかったからである。課税は，実際政府の最も難しい機能であり，市民は課税に対して最も反抗的になりやすい。それゆえに綜合的な目標は，国の状況と国情に最も適したやり方を採用することである。

アダム・スミスは，イギリスでは初めて，政治経済学についての合理的で体系的な著作を著わした。エコノミストたちの論拠を広く取り入れてはいるが，課税の一般的な対象についての考えは違っている。この体系は新奇で，だから今なら提案すればすぐ承認されるような原理を確立するためにも，沢山の論拠と詳細な説明が必要のようだ。そこで彼の書は，立派で第一級の価値あるものと認められたとはいえ，冗長で退屈だと考えられてきた。

フランスでは，ジャン・バチスト・セーが政治経済学の主題について非常に優れた著作を書いたという功績を持つ。彼の構成は明快で，思想は明晰で，文体は鮮明で，そして全主題はスミスの著作の半分の量の中に納まっている。そしてこれに加えるに，正確さと諸原理の展開においてかなりまさっている。

今ここに示すトラスィ上院議員の著作は，この科学における先駆者たちのすべての知識と，それ以後の経験をふまえ，議論が深まり主題がより熟したという利点を持って現れた。それは次の重要な諸点において確かに優れている。……[22]"

4. ジェファスンのスミス観

ジェファスンは約6,000冊の蔵書を持ち，これが Library of Congress の核となったことは有

注 (22) *A Treatise on Political Economy: to which is prefixed a supplement to a preceding work on the understanding, or elements of ideology, with an analytical table, and an introduction on the faculty of the will.* By the Count Destutt Tracy, member of the Senate and Institute of France, and of the American Philosophical Society. Translated from the unpublished French original. Georgetown, D. C. Published by Joseph Milligan. 1817. W. A. Rind & Co. Printers. pp. iii–iv. タイトル・ページに訳者ジェファスンの名はない。序に用いた手紙の日付は1818年10月25日なので，実際に出版されたのはそれ以後であろう。原本は慶大図書館にある。

名だが，この数はスミスの蔵書の倍であり，社会科学の面においても精選され質の高いものであった。そのことは，スミスの蔵書の著者の48%はジェファスンの蔵書に含まれ，『国富論』に引用された著者の63%，94人の著作が含まれている[23]ということからも察しうる。経済学的な著作も数多く，Malthus, Ricardo, Hume, Cantillon, Harris, Postlethwayt などを読み，*Edinburgh Review* を定期購読していたようだ。

ジェファスンは『国富論』のアメリカ版（1789年）以前の1784年版を所有し[24]，ウィリアム・アンド・メアリ大学でマディスンが1884～98年のある時期に初めて『国富論』をテキストとして用いた時にも，これを推薦したのはジェファスンだと伝えられる。

だが，ジェファスンがスミスについて，いや経済学について明確に文書において言及したのは1790年，彼が国務長官になった年（48歳）で，かなり遅かった。85年にフランスに渡り，デュポンら重農学派の経済学者と親しく交わったはずだし，1785年4月27日の James Madison からの手紙と，同年6月16日の James Monroe からの手紙はスミスの『国富論』について触れている[25]のに，ジェファスンはそれまで個々の経済学者については何も書いていない。

スミスとジェファスンは，ともに18世紀の啓蒙思想，自然法思想，自由主義，反重商主義，反独占，合理神学の流れに属し，ともに科学の広汎な部門に強い興味を示し，イギリスの学者とアメリカの政治家というように主な活躍分野は違っても，共通する時代の精神を深く呼吸していた。特にスミスを生んだスコットランドに関して言うと，ジェファスンは少年時代には Douglas というスコットランド人の牧師からラテン語，ギリシャ語，フランス語を習い，ウィリアム・アンド・メアリ大学ではスコットランド人 William Small 教授から大きな影響を受けた。たばこ貿易の相手でもあり，当時のヴァジニアはスコットランドの啓蒙思想の影響下にあり[26]，スモール教授の影響でジェファスンは Kames, Shaftesbury, Hutcheson を学び，後には自然にヒュームやスミスに親しんだことであろう。またフランクリンや Dugald Stewart らスミスと共通する友人も何人かいた。

したがって，1790年に“政治経済学においては国富論は現存するものでは最良の書”と賞讃したことは，この書の持つ価値からしても，またこの書の示すいくつかの結論がジェファスンにとって好ましい（自由貿易論，投資順序における農業優位，植民地独立容認，政府の機能制限など）ことからしても，またその啓蒙思想が両者に共通していることからしても，当然であった。しかしこの時また，

注 (23) Hewitt D. Adams, "A Note on Jefferson's Knowledge of Economics." *The Virginia Magazine of History and Biography*, LXXV (Jan. 1969), 70.

(24) William Harwood Peden, "Some Notes on Jefferson's Libraries," *William and Mary Quarterly*, 3rd series, I (July, 1944), 270. 蔵書については Charles B. Sanford, *Thomas Jefferson and his Library* (Hamden, Conneticut: Archon Books, 1977) がある。

(25) *The Papers of Thomas Jefferson*, VIII, 111, 216.

(26) Garry Wills, *Inventing America: Jefferson's Declaration of Independence* (New York: Doubleday & Co. 1978) は，「独立宣言」の源がロックだという通説に抗して，スコットランド啓蒙思想の影響を重視している。

チュルゴとフランスのエコノミストの書を推していることも注目すべきだろう。

次にジェファスンがスミスに言及するのは，大統領に就任した後である。この時期の大きな問題は，建国期の国論の分裂に架橋すること，彼は大統領として『ヴァジニア覚え書』のような国民皆農論を公式に主張することはもちろんできず，農・工・商・海運業の振興を言わねばならなかったこと，そして Say の *Traité d'Economie Politique* (1803) が出版されたことであった。

1807年の手紙は，セーに対する評価がスミスに対する評価を抜いたことを示す。スミス以上に評価する理由は，短くてわかりやすいという単純なものだが，この頃はチェサピーク号事件，出港禁止法断行という大統領としては非常に深刻な時期であり，翌年にタマーイ協会に宛てた手紙は“製造業者と農民を隣合わせに住ませる”として工業化を容認している。このように，スミス評価が落ちた時点は，対外危機，彼の経済論調の若干の変更とほぼ機を一つにしている。

その後も公債史や貨幣論においてスミスは言及されてはいるが，1816年に至って“冗長にして退屈”(prolix and tedious) というはっきりした批判の言葉が加えられた。この「解説」はほとんどそのままトラスィの訳書の中に再現されているが，この叙述はジェファスンの最晩年に発表されたもの (74歳頃) なので，“ジェファスンによる経済学史の最終的総括”とみなすことができよう。

「解説」において取り上げられたのはエコノミスト，スミス，セー，トラスィであり，フランスへの親近感が強い。しかし，政治経済学が本格的な科学となったのはエコノミストの手によるとしつつも，ジェファスンと彼らの思想の間には重大な相違がある[27]ので批判を加えている。『国富論』は立派だが“冗長で退屈”というのはかなり手厳しく，またそういう批判は McVicker，リストなどからも言われていた[28]。

それに対してセーとトラスィに対する讃辞は際立っており，トラスィについては，自ら訳筆をとっただけにひとしお愛着が深いのは当然だが，その価値として，「解説」の前に序文的に付せられた手紙 (1818年10月25日付) には“この政治経済学の健全な諸原理を広めることによって，それは公的な産業を今それを食いものにしている寄生的な制度 (parasite institutions) から護るであろう”と言っている。この寄生的な制度とは，1818年 Albert Gallatin に宛てた手紙に “parasite institutions of banks” と説明している[29]ので，トラスィの書は特に銀行批判に有効だと考えたためであろう。

またジェファスンの経済思想において特に際立った特徴は，フランクリンなどと共通することではあるが，ヨーロッパに対してアメリカの特殊性，大西洋を隔てたアメリカの優位を強調することであった。アメリカは地理的に自然の荒野であり，無限の未耕地があり，神に撰ばれた新天地である。歴史的には封建制度がほとんどなく，農業の発展によって人口は急速に増加し，本国の圧制に

注 (27) 拙稿「ジェファスンとフランス重農主義」p. 159.
(28) O'connor, p. 113.
(29) *The Jeffersonian Cyclopelia*, ed. John P. Foley (New York: Russell & Russell, 1900) I, 271, Ed. Ford, X, 116.

反抗し自由・平等を求めた人民が共和政体を樹立した。そこでは農民の数が圧倒的で，都市の腐敗はなく，農民の独立心・活力・健康・質素・純朴・愛国心が，共和制を支える道徳的基礎となっている。こうした社会における経済学は，明らかにヨーロッパとは異なるべきだという考えを，彼は比較的早くから持っていた。

> “ヨーロッパの政治経済学者たちは，あらゆる国家は自力による工業生産に努力すべきだということを一つの原理として樹立した。……けれどもわれわれの場合には，農耕民の勤勉を誘う無限の土地がある。”(30)

こうして，経済学はその国情に適したものであるべきだという意見は晩年の「解説」にも見られるところで，ジェファスンは，ヨーロッパの経済学を尊敬し学びつつも，またアメリカでは未だ経済学のテキストがないためこれに頼りつつも，これに盲従することはなかったようだ。

ジェファスンの経済思想のラディカルな線は，

反ヨーロッパ＝反都市化＝反工業化＝反資本主義化＝反銀行資本＝反商業資本

ということになり，それは結局農本主義に帰着するだろう。もちろん大統領時代には戦争の危機もあって商工業も重視せねばならず，銀行設立や保護関税などにおいて現実的な政策をとるなど，妥協が目立ったが，『ヴァジニア覚え書き』の徹底した農本主義，国民皆農論は，最晩年の出版まで改訂されることはなかったのである。

そこでスミスについて見た場合，『国富論』のブルジョア的な性格は結局ジェファスンとは異質のものではなかったか。ジェファスンにとって，資本主義経済の解明というような問題意識はなく，ヨーロッパとは異質な共和国の建設が課題であった。国民皆農論はスミスがアメリカに要請した立場という面はあるのだが，ジェファスンにとってそれは資本の投下順序というよりは，アメリカの特殊性と道徳的な規準，世界経済全体にとっての利益からの問題であり，古典学派の homo oeconomicus と普遍主義はジェファスンの選ぶところではなかった。スミスを尊敬すれど帰依せず，『国富論』を利用すれど盲従せず，狭くは最西端のプランターとしての農本主義，広くは後進国としてのアメリカの立場，そして経済を道徳に従属させる立場を，現実的に守って行こうとしたのである。

〔付記〕 本稿は，『国富論』200年記念の年に行われた経済学史学会第40回全国大会（1976年，九州大学にて）における私の報告「トマス・ジェファスンの経済思想とアダム・スミス」，および同学会創立30周年記念第44回全国大会（1980年，成城大学にて）の共通論題「アメリカ経済学」における私の報告「アメリカ的経済思想の形成――トマス・ジェファスンを中心に――」にもとづいている。

1973年，私がACLSのフェローとしてジェファスン研究のためにヴァジニア大学へ留学する際に，

注 (30) Jefferson, *Notes on the State of Virginia*, ed. with an introduction and notes by William Peden (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1955), p. 164. 中屋健一訳 p. 296.

また1816年 Benjamin Austin への手紙で言う，“政治経済学のような複雑な科学においては，あらゆる時代と環境について理解を助け好都合な一つの公理はない。” *Jeffersonian Cyclopedia*, I, 272.

高橋先生は，「独立宣言」の一部の訳と言われる福沢諭吉の“天は人の上に人をつくらず，人の下に人をつくらず。”について，興味深い話を聞かせてくださった。だが翌年，ハーバァード大学を訪れた時尾上九朗右衛門丈から先生が気管支肺炎のため入院されたことを聞き，90歳というその時の年齢を考えると，再びお目にかかるのは難しいとひそかに覚悟せざるを得なかった。しかるに翌々年帰国して三田の大学院校舎に入ると，扉の透き間から以前と少しも変わらぬ朗々たる美声が廊下に流れ，私は先生の長寿にまるで奇蹟を見るごとく驚嘆したのである。

先生は，1923年アダム・スミス生誕200年記念講演会が東大と慶大で行われた時，東大では「マーカンティリズムとアダム・スミス」，慶大では「アダム・スミスの生涯」と題して，講演をされた。1940年スミス没後150年記念講演会が慶大で行われた時は，「アダム・スミスと国民主義経済学」と題して講演された。また1949年東大で行われたアダム・スミスの会発会に際しての公開講演会においては，「アダム・スミスと社会主義者」と題して講演された。これらの講演については私は記録によって知るのみだが，1973年慶大におけるスミス生誕250年記念講演会においては，小林昇立教大学教授（当時）の前に演壇に上られて「アダム・スミスの人となり」と題してスミスの人間像を語られ，1976年『国富論』200年記念講演会においては，「アダム・スミスと慶応義塾」と題し予定時間を越えて楽しげに語られた先生のことを，今も懐しく思い起こす。この年，本誌の『国富論』刊行200年記念特集号に寄せられた先生の「経済学の始祖」と題する巻頭論文は，本誌のために語られた録音の原稿に，先生御自身が筆を入れられたものである。創刊以来長く本誌を育ててこられた先生の，これが本誌に対する最後の御寄稿となった。先生は，スミスの生誕300年は無理にしてもせめて没後200年（1990年）にはまた壇上に立ちたいと言っておられたのに，もはやその夢はかなわぬ。

ジェファスンを調べスミスをひもとく時，私は先生の半世紀以上に及ぶ学界への貢献を思わざるを得ない。そして壮者を凌ぐ晩年の先生に親炙しえた幸運なる日々を回想し，御冥福を祈ること切なるものがある。

（経済学部教授）